

私たちの意識化プロジェクト報告書

～働き方を見つめる絵本作りを通して～

英語学科3年 鈴木沙波

国際関係法学科4年 吉田亜矢子

要旨

1. 趣旨

共同研究者、鈴木・吉田の問題意識の中に日本人はどこか億劫そうに働いているのではないか、人間らしい働きをしている人が多くないのではないかということがあった。働く中で、主体的でない、抑圧者（経営者など）の価値基準に支配されている、働く仲間同士の結びつきの欠如、競争、交換可能な部品としての取り扱い、意義ややり甲斐の欠如 などがあると感じている。新自由主義グローバル化の進行と日本社会がもともと抱える保守性・閉鎖性が、その傾向を助長しているのではないかと仮定する。これらからこの絵本作り（ゼミ論文）は出発した。絵本という平易な言葉で視覚的に表現する事により、読み手の人々に対し働き方を見つめなおす問題提起をし、望ましい働き方を模索するきっかけ作りを行う。絵本作りに先駆けて、「自分たちの思い込み」にならないようにするため、アンケート調査、文献読み取り、労働者協同組合にインタビューなどを行う。

2. 実際に行動してきたこと

・アンケート 少数のアンケートではあったが、アンケート結果から学ぶものが多かった。「努力、生きがい、社会貢献、自己責任、人の役に立つ、キャリアアップ」などの言葉がアンケートの回答に多くあった。すべて自助努力で何か仕事上の問題が起こったときに解決する傾向が見られた。また、「あきらめ」が存在し、「仕方がないからやる」というような回答もあり、「明るく考え、頑張る働く」という回答が印象的だった。

・文献読み取り 「日本では仕方がない」という言葉に魔法がかかっている。何でも締めくくりには「仕方がないよ」という消化不良を起こす言葉がある。人々をあきらめさせてしまうのは、教育に問題があるからである。人と違う意見は尊重されず、皆一緒に同じ行動、考える事を求められる。本来仕事というのは生き甲斐にもなるべく人間の生活の中で重要な役割を持っているのにもかかわらず、その仕事に押しつぶされてしまいそうな人が多いのではないか。そこにオルタナティブとして労働者協同組合が存在する。

・労働者共同組のだんらん&わくわくクラブ

・だんらん（岡本さん）「自分達が何かをしたい」、から働きするにはどうしたらよいか？ということ常日頃考えている。民主的に事業を運営するということは、労協の最大の特徴である。話し合いを繰り返し、意見を出し合うことで方針が決まっていく。経営者に首を切られることがないため仕事を頑張る事が出来る。自らが真の意味で責任（自己責任）を持つので、有意義な働き方が可能になる。

・わくわくクラブ 多様化していく子どもと親を学童児童施設がサポートを行っている。何が彼らには必要なのかということ、主体的に職員全員が考え、行動に移しながら運営している。自分達の提案も、話し合いによって認められれば、可能となる。自らが仕事を見つけていく。

3. 絵本のあらすじ

社会人である主人公「オレ」と、彼を取り巻く様々な人々との日常的なやり取りの繰り返しで構成されている。登場する人々は学生、フリーター、会社員など様々な立場ではあるが、皆一様に、社会生活とりわけ「働くこと」と向き合い、そのギャップの中で苦しみ、ある者はドロップアウトしていく。「オレ」は、そんな彼らを非難し見下し、彼らから発される問いに、時にはっとしながらも耳を傾けない。その態度は、同時に自らを抑圧することになっているのだが、それにも気づいていない。最終的に「オレ」自身は解雇に追いやられ、その時点で初めて自らの働きづらさに気づくこととなる。